

台湾における修行「仏七」と門派化の進む寺院

——西蓮浄苑・慧日講堂・南普陀寺・靈巖山寺・仏光山——

蓑 輪 顕 量

はじめに

台湾には興味深い瞑想修行法が存在する。それが「佛七」である。筆者は先に西蓮浄苑の仏七について簡潔な報告を行ったが¹⁾、そこではその歴史的な背景について論じることがほとんどできなかった。そこでまず仏七について簡単に再説することから始めたい。仏七は、読んで字の如く念仏を七日間行う瞑想修行法である。しかし唯だ阿弥陀仏の名号を唱えるだけではない。阿弥陀の名号を唱える時間と静かに阿弥陀を念じる時間との二つが混在するのである。時間はお線香の燃える時間を基準にし、「支香」との言葉を用いるが、お線香一支香分の時間を基準としている。ほぼ小一時間である。西蓮浄苑の場合は、二支香分或いは三支香分の時間が一つのサ

イクルになる。まず最初の一支香分の時間を使って阿弥陀仏の名号を唱えながら、本尊の回りを行道する。これは身・口・意の三業による念仏とされる。次に自分の席に着き、姿勢を正して南無阿弥陀仏の名号を唱える。これが口・意による念仏である。この念仏はペースを速めやがてまたスローになる。この時には多少なりとも精神の高揚が生じているように思われる。次に鐘の音を合図に静かに坐り続ける。これは意による念仏であるという。このように、身口意の三業から意の一業に渡る念仏が行われると位置づけられているのが西蓮浄苑の仏七の特徴となっている。(行道しつつ唱える)(坐って唱える)(静かに坐る)という三つのパターンに分けられるのである。

最初の数日間は、午前と午後二座、四日目から夜の一座が附加

され、日に三座が行われる。このように動きながらの念仏と静かに坐りながらの念仏が混在するのが特徴である。静かに坐る時には阿彌陀の相好を観想することが行われ、時には白毫観も行われている。

では、何に基づいてこのような行法が工夫されたのであろうか。本論ではまずこの事について探求し、次に再び調査に訪れた寺院の事例報告を行うことにしたい。

なお、調査は、平成十七年二月十四日と十七日と平成十八年二月六日と十日の二回にわたって行った。西蓮淨苑と慧日講堂に関しては平成十七年の調査に、それ以外は平成十八年の調査に基づくものである。

一 西蓮淨苑の仏七の背景

西蓮淨苑の仏七は、民国六三年（一九七四）より始まった。最初は夏期に行ったが、蒸し暑さに不便を感じ、仏七は冬の行事とし、夏期は修学会に改め、現在に至っているという。指導者であった智諭法師（一九二四―二〇〇〇）は仏七の期間中に開示を行っていたが、その開示の記録が、現在、西蓮淨苑から出版されている²。その記録によれば、智諭法師は、自らの工夫で現在のような身口意、口意、意というパターンを創造したという。

智諭法師の言及に依れば、台湾に仏七が定着し広まるようになったのは煮雲法師（台湾東部に浄土の教えを広め、高雄の鳳山に住した（一九一九―一九八六）の功績が大きいという。智諭法師も煮雲法師の領導を敬慕しているのであるが、実際には自らの工夫を加えた。それは、現代の人々、すなわち末法の時代の衆生は坐って時間が経てば腿の痛みを感じ、一方、立って時間が経てば足に痛みを覚えると言った具合に機根が熟してはいない。よって歩き回ったり、立ったり、坐ったりといった三つのパターンを工夫したという³。

さて、その浄土の念仏法門であるが、智諭法師が典拠とするものは、『無量寿経』『観無量寿経』及び『阿彌陀経』の所謂浄土三部経と『繫舟三昧経』である。特に『繫舟三昧経』に説かれる「欲生我國、持念我名」との記述に瞠目するものがあつたと見え、仏語を信じて行おうとの意識が見える⁴。また、仏七の具体的な規矩に関して、靈巖山の儀規に倣い、善導和尚の念仏を主とするのを参照したという。靈巖山は、大陸は蘇州にある靈巖山寺を指し⁵、その寺院の出身である妙蓮和尚が民国七〇年（一九八一）台湾に来島し、民国七三年（一九八四）南投縣埔里鎮水頭里に台湾版の靈巖山寺を創建している⁶。智諭法師の西蓮淨苑における仏七の開始は民国六三年であるから、直接影響を受けたということはできないであろう。善導

（六一三―六八一）は、言うまでもなく中国浄土教の大成者と目される人物であり、日本の浄土教にも大きな影響を与えていることは言うまでもない。善導はひたすら合掌し念仏することを要求し、仏の回りを巡ることも仏を礼拝することもしなかつたとされる。善導の念仏は、「立念則念一万二万、坐念則念一万二万」であつたと智諭法師は捉える。実際に、同様の表現は、善導が集めたという『観念阿彌陀佛相海三昧功德法門』の「般舟三昧經請問品明七日夜入道場念佛三昧法（出般舟三昧經）」に登場しており、その文言は次のようなものである。

佛言、想念阿彌陀佛真金色身光明徹照端正無比、在心眼前。正念佛時、若立即立念一萬二萬、若坐即坐念一萬二萬。於道場不得交頭竊語。晝夜或三時六時。⁽⁷⁾

このように、智諭法師は仏七の淵源を善導の著作に求めている。しかし、善導は称名念仏の提唱者としては名高いが、実際に行われている仏七では、一支香分の黙座の時間が設けられており、善導の影響だけであるとは言えない。この部分に対する經典の典拠としては『観無量寿經』が挙げられているが、実際にはその他の諸祖師の伝統も踏まえられているようである。というのは、西蓮淨苑で使用されている『仏七唱誦手冊』の中に、「円満日礼祖」として先人名が記される興味深い箇所が見られるからである。⁽⁸⁾ この手冊は、正式に

は『西蓮淨苑 仏七(一)唱誦手冊』と命名されており、「香讚」「仏説阿彌陀經」「讚仏偈」「回向偈」「二時臨齋儀」「大回向」「円満日礼祖」の七節から構成されている。その該当箇所を掲げれば次のようなものである。

円満日礼祖

- 頂礼西天東土歷代祖師
- 頂礼天下宏揚佛法諸大善知識
- 頂礼初祖廬山東林遠公大師
- 頂礼二祖長安光明導公大師
- 頂礼三祖南嶽槃舟遠公大師
- 頂礼四祖五台竹林照公大師
- 頂礼五祖新定烏龍康公大師
- 頂礼六祖杭州永明寿公大師
- 頂礼七祖杭州昭慶常公大師
- 頂礼八祖杭州雲棲宏公大師
- 頂礼九祖北天目靈峰旭公大師
- 頂礼十祖虞山普仁策公大師
- 頂礼十一祖杭州梵天賢公大師
- 頂礼十二祖紅螺資福醒公大師
- 頂礼十三祖蘇州靈巖量公大師

頂礼古今連社宗師

頂礼主七和尚

「円満日礼祖」とあるから、仏七が成満した日に特別に礼拝するものであろう。まず初祖として挙げられる廬山東林遠公大師は廬山の慧遠（三三四―四一六）である。慧遠は、道安の弟子となったが、後に分かれて三八四年以降、廬山の東林寺に住した。四〇二年には同志とともに念仏の結社になる白蓮社を結成したことが知られる。⁹⁾

慧遠の念仏は観想念仏であったと考えられ、彼は観想念仏で著名な僧侶となる。次の第二祖に挙げられる長安光明導公大師は、称名念仏で名高い善導（六一三―六八一）である。善導は道綽（五六二―六四五）に師事し、道綽の没後には長安郊外の終南山の悟真寺に入り、修行に励んだという。後に長安の光明寺や慈恩寺等に住したことが知られる。善導は、口に「南無阿弥陀仏」と唱える称名念仏を重視し、日本の浄土宗の開祖になる法然は「偏に善導一師に依る」と述べており、そこにも称名念仏の代表と捉えられていることが明かである。

このように初祖と第二祖とに観想念仏と称名念仏の系列に連なる人物が据えられている点が興味深い。また、初期の第十三祖になる蘇州靈巖量公大師（聖量印光、一八六一―一九四〇）は、大陸は江南地方、蘇州の靈巖山寺の法師である。¹⁰⁾これは、智諭法師が、仏七

は靈巖山寺から影響を受けたと述べることも符合する。智諭法師の仏七は、実際にこの量公大師から影響を受けているのである。¹¹⁾つまり、この「円満日礼祖」からは、現在の仏七は、大陸における観想念仏と称名念仏の二つの系統が融合され出来上がった物であることが推知されるのである。また本来、中国では念仏の二つの系統を峻別することは行われなかったと考えられるので、二つの系統に区分すること自体、誤った見方かも知れない。しかし、日本の浄土宗、真宗の伝統では称名念仏に一極化し、観想念仏の行法はほぼ見られないので、この点は日本とは大いに異なると言わざるを得ず、注目しても良いものである。¹²⁾そしてこの仏七の念仏行の中に心を一つのものに集中させていく側面（心一境性）を確実に見出すことができる。

二 慧日講堂僧侶へのインタビューより

慧日講堂は台湾の仏教に関する歴史を考える際には、とても重要な場所である。台湾仏教の「人間仏教」という方向性は印順法師（二九〇五―二〇〇五）によって築かれたが、その印順法師が講説専門の道場として創建したのが台北の慧日道場である。住僧の一人



慧日講堂

である宗覚法師がインタビューに応じてくれたので、その概要を記しておきたい。現任職は慈忍法師であるが、現在は台南の寺院復興のため留守がちであるという。

慧日道場は、現在、その活動が活発であるとは言い難い状況にあり、毎週土、日曜日のみの

オープンであるという。土曜日は講義があり、午前八時三〇分より一時三〇分まで行われる。日曜日は九時から一二時まで、仏教のその他の団体に場所貸しをするそう。つまり独自の活動は下火であるということらしい。土曜日の講説は、目下の所は中観との事であったが、二十代、三十代の方が多く参加し、総勢五十〜六十名になるという。行事としては第四日曜日に八閩齋会を行っており、月曜の朝まで非時食を守る。五、六人の僧侶が参加し、昼食のみ慧日講堂の会場で取るそう。六十人くらいまでは比較的楽に対応できそうだが、百人を超えるとその用意が大変になってしまうとのことであった。

講堂内の二階には図書館が整備されているがあまり利用されてい

ず、その理由の一つにインターネットの普及があるそう。四階部分は外国語の仏教文献が收藏されている。現在、慧日講堂に所属する僧侶は七人で、その他に三、四名の客分の僧侶が居るとのこと。合計十名前後で僧伽を営んでいる。客分の僧侶は海外生活の経験のある人たちで、海外に居住する華僑の方々に布教しているという。

現在の慧日講堂は一九九六年に改築され、五階建ての建物となった。その最上階に相当する五階には年を取った老僧が居住する。この慧日講堂で長く暮らした人が多く、ここで最後を迎えることが多いという。いわゆる僧侶の終身の住処ということであった。ちなみに尼僧の場合は、出家した際の寺院で最後を迎える人が多いという。これは出家者と雖も生きているので当然であるが、晩年をどのように過ごすかに関わる問題である。つまり最上階は老齢になった時の高齢者施設の役割を担っているらしい。残念ながら、部屋がどのようにになっているのか、介護はどのように行われているのかなど、見学することも精しく聞くこともできなかった。

但し、台湾の仏教に対する興味深い私見は聞くことが出来たので、記しておきたい。それは、台湾の仏教には拝礼が多いが、法鼓山のみ異なるというものであった。法鼓山は学問仏教であるという評価があるのだそう。つまり正当な仏教教理を研究しているのは

法鼓山のみであるという理解が存在するのである。その他の寺院はそうではなく、つまり仏神に対する拝礼を重要な内容としていているというのである。

また、ここ十年くらいの動向であるらしいが、宗派的な意識が芽生えつつあると言う。実際、その宗派とは、①高雄の仏光山、②台北の法鼓山、③中部の中台禅寺、④中南部の正覚精舎（埔里鎮にある寺院で六十人くらいが居住する。戒律の厳守を標榜する。後掲）、⑤花蓮の慈濟功德会、⑥台中市の南普陀寺（戒律の厳守を實踐する寺院。後掲）だそうだ。

日本の宗派のイメージからすれば、出家受戒の最初から異なるように思ったので、受戒から異なるのかどうかを質したところ、そうではないとのことであった。よって、宗派というよりは門派の方が適切な表現かも知れない。実際、三壇大戒は宗派を問わず、有名な僧侶が戒師になる時に受戒希望者が殺到して行われているのだそう。その有名な僧侶として挙げてくれた方々は、①海濤法師（インターネットの菩提愿で活躍）、②煮雲法師（東台弘法の第一人者）、③了中法師（玄奘大学の創始者）、④惟覚禪師（中台禅寺の創設者）、⑤浄心法師、浄良法師（両名とも中華仏教協会の重鎮）、⑥道海法師（法臘の長い法師）、⑦浄空法師（浄土教で著名な法師）などという方々であった。

また、台湾の僧侶は尼僧が多いが、その大半が最近では大卒であることも特徴になるだろうという。十五年くらい前までは大卒は珍しかったというから、最近の傾向であることは明らかだそう。その理由として、仏教者は「内に声聞を修し、外に菩薩を現ずる」¹³の理想であり、それに合致するのが尼僧であるから、女性の出家者が多くなるのだという。なぜ尼僧がそのような仏教者の理想に合致するのか、その理由は明確には示されなかった。しかし推測してみれば、女性の方が男性よりも戒律の遵守を厳しく要求されることは一般に考えられるから、その意味で声聞に合致するのであろう。また菩薩の行うべき仕事であるところの利他に相当する行為の典型が慈善救済活動であるとすれば、花蓮の慈濟功德会の活動は、まさしく女性による菩薩道の実践になるであろう。実際、母性愛は女性の特徴であり、慈悲はその愛より生まれやすい。このような点から、女性は声聞の姿で菩薩の仕事をするという了解ができあがったのではないだろうか。いずれにしろ、男僧は声聞的なところが強く感じられるらしいが、それは自利の修行すなわち瞑想の実践などが念頭に置かれているのではないだろうか。

いずれにしろ、印順法師の理想は菩薩道と声聞道の両者を実行することであり、その典型が尼僧に求められたと考えられる。



南普陀寺前にて

三 台湾の現代仏教——台中・埔里を中心に——

慧日講堂における僧侶のインタビューを受けて、幾つかの重要と思われる寺院を平成十八年二月に訪ねた。中部の町になる台中の南普陀寺、埔里の正覚精舎、高雄の仏光山などである。以降、現地調査に基づいて得られた知見を記すこととする。

1 南普陀寺

台中の郊外、山の中腹に存在するのが南普陀寺である。仏学院を併設し、その仏学院の寺院として名高い。ここは監仏学院院长を道海長老が勤める、台湾でも比較的名の知られた仏学院である。印順法師が創立した福嚴仏学院とも親しい関係にある。ここで次の二人の方にインタビューをすることができた。

監院 釈淨旭法師

教務課助理 釈成戒法師

南普陀寺の創建は民国四六年（一九五七）に始まる。その年、現在の場所に土地を購入し、民国四九年（一九六〇）に

開墾を始め、民国五〇年（一九六一）に仏学院を開校した。大陸の福建省から渡った国強法師を開山法師として開学し、やがて一九六二年には広化上人を教務部長として、律学の勉強を中心とする律学院を目指した。その方針は戒律と浄土に帰することを目的としたものであった。戒律はもちろん『四分律』を中心とし、唐代の道宣の著書である『四分律行事鈔』を中心に研鑽を進めている。また、律学院を目指すだけのことはあつて律の厳しい遵守も僧侶に求めており、男女の別住、非時食、布薩の遵守を行っている。実際に、波羅夷法を犯した比丘は還俗に処せられる。布薩は毎月十四日、二十九日に行われ、両日の夕方六時から比丘戒と菩薩戒の布薩が行われる。双方を終えるのに一時間半から二時間の時間が掛かるといふ。

菩薩戒は各自の意志に従つて梵網戒または瑜伽戒が用いられ、自分が犯した学処を掲げることから布薩は始まるという。波羅夷罪で擯出させられた比丘もあり、また僧残法を犯した場合には、摩那埵をするために必要な部屋もあり、如法の行為が行われていれば、一定の期間を経た後に、僧伽に戻すということも行われている。実際、厳密に律の規定が守られているようだ。

夏安居は四月十五日から七月十五日までの三ヶ月間行われ、その期間には特に戒律の勉強をするという。この際には近郷から戒律の勉強に参加する僧侶もある。第二代目の監学院院长になった広化法師の

時から布薩が始まったのだそうだ。南普陀寺の学生の中には沙弥もいる。彼らはまず一年以上の期間、居士を勤め、それから沙弥になる。さらに沙弥から一定の期間を経て受戒を経て比丘となる。信仰がしっかりとしていなければ出家を許さないそうで、実際には内規ということであったが、仏に対する礼拝が数万回以上、また楞嚴呪の唱和が四万回以上でなければ出家を認めていないという。

第二期に仏学院の院長を務めた広化法師は江西省の出身で、蒋介石と共に來台した法師である。第三期の院長を務めた道海法師は山西省の出身という。道海法師は民国三八年（一九四九）に香港に定住したが、民国六九年（一九八〇）に埔里の円通寺に戒律の講義にやって来て、それが機縁となり台湾に定住することになった。やがて白聖長老が來台し、三壇大戒が成立し、それからは台湾の仏教組織は確固として成立することになったという。

現在、南普陀寺の仏学院は福嚴仏学院と良好な関係にあり、福嚴の教員が南普陀寺に教えることも、またその逆もあるという。ちなみに釈厚観法師（福嚴の院長）もその一人だそうだ。南普陀寺は仏学院しかも律学を中心とする「律学院」であり、かつ寺院に付属する施設となっているので、卒業生の中には南普陀寺の僧侶として残る人も複数あるという。よって「戒律を生活の中に取り入れて行く」ことが目的であり、そのような実践を行っている人たちが町

中に出て、教えを広めることも可能であるという。

仏学院の教科科目は、ほぼ漢訳の経論が中心であり、天台、唯識、般若の三部門の柱が立つという。經典は『法華経』が中心であり、唯識の修学においては『瑜伽師地論』や『唯識三十頌』が、般若学においては『大般若経』『金剛般若経』『般若心経』が学ばれる。また行の視点から見れば、まず戒律があり、次いで浄土があるという。浄土は教学上の目的ではなく、あくまでも実践上の目的である。坐禅も授業の中に取り入れられ、止観の中に入っている。年限は専門課程が三年、一般の高等学校を卒業してから入り、学部は四年のコースであるが、実際には専門課程の上に一年を追加する形で大学になるという。よって仏学院に入るには、一般の高卒以上の資格が要求されるが、中卒の入学も実際にはあり、その場合には一ヶ月の観察期間が課される。

現在、南普陀寺の僧侶は二十五名であるが、雨居の時期（四月から七月まで）には市内の一般の僧侶にも学院を開放し、律学を修学してもらえよう便宜を図っているため、七十〜百人程度の僧侶が集うことになるらしい。仏学院はそのまま講義を続け、そこに市内の僧侶たちも参加することができる。

仏学院の一日の時程は次の通り。

午前 三時五〇分

起床

四時三〇分	朝課
六時〜七時	粥座（朝食）
七時〜八時	作務
八時〜十一時	授業
一一時〜	齋座
午後 二時〜五時	授業
七時〜八時	晚課
八時〜九時	自習
九時三〇分〜	開枕

教師陣は全員外部の先生を招いており、書道のみ在家の方をお願いしている。ちなみに南普陀寺は仏学院中心に動いており、そこに居住する僧侶が町に行き法会をしたり、あるいは葬式をすることも無く、また寺院においても在家の方のために説法をすることも無い。葬式は出入りをしている方の場合には特別に義務的に行う。対外的に行っているものは、七月十五日の夏安居の終了した日に行なわれる施餓鬼法会のみとのことであった。なお、在家の方は、毎月八、十四、十五、二十三、二十九、三十日のいわゆる八齋戒を守る六祭日に、南普陀寺を訪れるという。しかし、その人数は少なく、三十名前後だそうだが。但し、一般僧侶を含めて対外的な行事として行う時は、二、三百人程度の方が集まるのだそうだが。台中には尼僧

道場が百カ所近くあり、布薩の時には、それらから尼僧の方々が南普陀寺に集まる。ちなみに、南林精舎が尼僧の戒律道場としては有名なところだという。また嘉義に存在する善徳寺も六十五名を超える尼僧が共住する寺院として有名どころだそうだが、同じく布薩に集まってくるとのことであった。

なお、南普陀寺の僧の言葉であったが、埔里にある正覚精舎（道海法師が初代の住持を務める）及び南投縣鹿谷にある淨律寺（ここも道海法師が院長を務める）は、この南普陀寺と関係が深いという。淨律寺は一般の人を対象としているが修行中心の寺院であり、子供を対象にしたプログラム（児童読経班）などを持っているという。また最後に次のような話もされた。台湾全土には現在、約二万人の僧侶がおり、その内一千人前後が上座仏教またはチベット仏教を信奉する僧侶だそうだが。伝統的な中国仏教と上座、チベットという新来の仏教が共存しているのが現状であるという。このような言葉を聞き、台湾の僧侶の方々が仏道修行に工夫を懲らしつつ、また一般の人々も仏教全般に寛容な姿勢を取っているように思われ、台湾の仏教の懐の深さを垣間見たような思いがした。

2 埔里・正覚精舎

埔里には現在、名高い寺院が三つほど存在する。第一は、一九八〇年代より仏七という修行で有名になり、壮大な伽藍を築いた靈巖



正覚精舎

山寺、第二は一九九〇年代より多くの出家者を輩出し、急速に巨大化した中台禅寺、そして、第三は少数の、といっても五十名以上の出家者が厳しい共同生活が続いている正覚精舎である。これらの寺院はそれぞれ特徴を持っており、靈巖山寺は仏七によって、中台禅寺は禅七によって、正覚精舎は厳しい戒律の實踐と修行とで著名になった。ここではまず正覚精舎について報告する。

正覚精舎は、中台禅寺と道路を挟んで対症的な位置にある。木立に囲まれたその入り口もひっそりとしていて迷いそうな処にあった。インタビューにに応じてくださったのは次の方であった。

知客 成礼法師

正覚精舎は中華民国七九年（一九九〇）に開山された精舎である。歴史はわずか一五年ほどであるが、戒律の護持で著名になっているという。開山は一法師、しかし本人は住持にはならず律師を招いて住持を任せ、本人は「捨てることは難しい」との言葉を残し、

寺を去った。最初は二十名の僧が修行できる程度の規模であったが、現在では五十名の僧を数える。「四分律」を守れる環境がここにはあるという。戒律を守ることができている間は仏法も残るだろうとの自負心を僧侶が持っている。現在では持戒で有名な寺院となり、アメリカからも問い合わせがある。ちなみに、先の中国仏教界の会長である浄心法師がこの地を訪ねたことがあり、僧侶が仏事供養や法要を何もしないのに生活ができていることに驚かれたという。十方からの供養のみで生活が成り立っているのである。現在、住持は閉関中であるとのことであった。いずれにしろ今までの仏教ではあり得なかったことをここから始めようとしているという。

また、この精舎に住する僧侶たちの中には、衣を糞雑衣のようにしている方が見られた。その理由を尋ねたところ次のような答えが返ってきた。別に糞雑衣ではないが、最初に衣を供養してくださった方の功德が継続するように考え、穴が開けば綻びを繕い、あて布を重ね続けているのだそうだ。それが糞雑衣のように見えるだけであり、特に糞雑衣を実践しているわけではないとのことであったが、今まで見たことのない繕いだらけの衣を身につけている僧の姿には正直、驚かされた。実際、中には見かねて衣を送ってくださる方もあったそうだが、困って他の僧侶の方に譲られたそうだ。

なお、正覚精舎の日常の日程は次の通り。

午前	三時二五分	起床（開枕）
	四時～五時	朝課
	五時～六時	（自習）
	六時～六時四〇分	朝食
	六時四〇分～八時	環境整備
	八時～九時	授業
	九時～一一時	自習または課役
	一一時～一一時三〇分	齋座
	一一時三〇分～	自習（自由）
午後	六時三〇分	
	六時三〇分～八時	晚課
	八時～九時	自習
	九時	消灯

現在の修行僧の平均年齢は四十歳前後であり、もともと若い者が二十九歳、もとも高年齢の者が七十八歳ということであった。ちなみに自習の時間とは、念仏、礼拝、勉強などどれを行っても良く、実際に念仏門を重視しているようであった。最初に十五分程度の礼拝、そして『無量寿経』を誦誦し、身口意を浄める。念仏法門は唱える内に自然と智が備わるものであるという。ちなみに、南普陀寺よりもこちらの法が歴史が古いという言い方をされていたが、歴史

的にはやはり南普陀寺の方が古い。しかし正覚精舎は戒律を実際に遵守しているという意識が強く、南普陀寺で良く勉強した上で、この精舎には来てほしいとの希望を持っているという。実際、両者を足繁く往還している僧侶もいるとのことであった。道宣の『四分律行事鈔』や弘一大師（一八八〇—一九四二）の著作集をテキストにして勉強に励むらしく、初心者には南普陀寺で基礎的な修学を望んでいるとのことであった。そうでなければ正覚精舎の生活は厳しく、また里人との接触もほとんど無いので、中には耐えられない方も出ているようだ。安居の期間は四月十五日から七月十五日であるが、特別な法要（盂蘭盆会など）もない。いつでも供養をすればその時々で利益があるはずであり、特別な盆供養をする必要はないだろうと考えている。安居の期間も僧侶は六十四名しか精舎の中には入らないので、特別に人数が増えるということはないという。精舎における僧侶の役職上の区分は次の通り。

- 住持（任職） 三年一期 再任も可 長老の推薦により選出
- 監院（寺院の中心的管理者）
- 紀綱（維納とほぼ同じ）
- 知客（お客への応対）
- 水頭（水を探しに行く責任者）
- 車頭（車を管理する責任者）

会計（金銭出納の責任者）

文書（書記）

庫頭（財産などの在庫管理）

蔵主（教典の管理）

維納（朝課・晩課を司る）

総務（電気などの管理）

監院以下の諸役は一年ごとに選挙で選ぶが再任も可能であるという。しかし実際には、大変な役職はやはり成り手が少なく、推薦が必要になるという。大晦日の日に会議を行い羯磨をして決めるが、現実には住持が適材と思った人に頼んで歩き、ようやく決まるとのことであった。そして次の年の役職は一月十六日に正式に発表されるという。

3 霊巖山寺

霊巖山寺も埔里に存在する寺院である。現在の住持は妙蓮法師であるが、二〇〇三年から閉関中であり、外部世界との接触を今は断っている。なおインタビューにに応じてくださった方は尼僧の修重法師であった。現在、霊巖山寺は台中に念仏堂を建設中であり、その落成の折りには妙蓮法師は閉関を止めて出てくる予定であるという。

この霊巖山寺は、大陸の蘇州にある霊巖山寺を本寺として成立し

た寺院であり、台湾における開山の中心人物が妙蓮法師である。妙蓮法師は、大陸に存在した「仏七」を台湾に紹介し広めた人物の一人である。昨年に台北の近郊、三峡鎮の西蓮淨苑で経験した「仏七」は、この埔里の霊巖山寺の「仏七」とは多少、異なるようだ。

その「仏七」はお線香一本分（支香）を基準としており、時間になおせば約四十五分前後である。最初は『阿弥陀経』を皆で朗唱し、次に伽陀を朗唱し、供仏を行い、それから唱名念仏を行う。この唱名念仏の時には行道をし、道場の中を隊列を組んで歩く。そして、十五分間だけ、声を出さずに念仏をする。この時には心の中で「阿弥陀仏」「阿弥陀仏」と三回唱え、それを基準の一回と数えて繰り返す。または十回ほど「阿弥陀仏」「阿弥陀仏」と心の中で唱え、それを基準の一回と数えて繰り返すという。観想念仏はあまり行われていない。

このような念仏の仕方は、大陸は蘇州の霊巖山寺の第十三代目の住持、印光大師によって発案され、妙蓮法師によって台湾に持ち込



霊巖山寺

まれたという。ちなみに印光大師は九十日間、般舟三昧を行うことを三回行っている。仏七では、四十五分のセット（お線香一支香分に相当）を一日、六回繰り返す。朝は三時一五分から五時三〇分まで、午後は六時三〇分〜九時三〇分まで行う。朝食は少し遅めで八時〜一〇時の間に取る。これは、参加者が多いので、そのように時間が掛かるということであろう。

なお、靈巖山寺は、現在男性の僧が約百名（沙弥を含めて）おり、正月の参加者が多いときには尼僧も手伝いに集まるという。ちなみに尼僧寺院は、四十分ほど離れた仏慈浄寺が拠点となっており、そちらには百名以上の尼僧が共住しているようだ。また、アメリカ、オーストラリアに別院を持っており、積極的な活動を行っているとのことであった。

4 台南・徳化堂

次に台南市内に存在する齋教の寺院、徳化堂を訪ねた。

住所 台南市中区府前路一段一七八號

徳化堂の建物は清の道光十七年（一八三七）に今の場所に創建され、現在では歴史的文物に指定されている。齋教は八齋戒を重要な教えとして持つ集団であり、在家仏教的な色彩が強い¹⁵。実際、日本が支配していた時代に齋教は組織として整えられ、台湾でも有力な集団となっていた。現在では、具足戒を保つ仏教集団が確固として

成立している故であろうか、あまり振るわない。徳化堂の周辺の在家の住民の方がお経を読むために、時折集まってくるだけであるという。依拠とされる教典は『大乘龍華正教宝経』であり、通称「五部六冊」と呼ばれる独自の教典である。この「五部六冊」は次のようなものである。

第一冊『苦功悟道』

第二冊『嘆世無為』

第三冊『破邪顕正』上・下

第四冊『正信除疑』

第五冊『泰山結果』

第三冊が上・下二巻に分かれているので、「五部六冊」と呼ばれる。明の時代に創作された教典で、その点から考えれば、民間宗教の一つと位置づけられる。

徳化堂は委員と呼ばれる方々の合議で管理されており、その委員の方は選挙で選ばれる。出入りをしている人たちは



徳化堂

五十名前後であり、委員は二十名前後であるという。齋教のお堂は廟であるとの意識が存在するようで、主管者は廟公と呼ばれる。信者は男性、女性及び居士の三種に分かれ、女性信者は蓮姑と呼称される。台南の徳化堂は古蹟として指定されたおかげで国家からの補助金がある。現在の住職は女性の方であり、他の地にも精舎を持っているという。特徴であるはずの八齋戒を受けたいと希望者が出た場合には、仏寺から僧侶を招待し受戒を行うか、あるいは全く仏寺に委託してしまうという。この点からすれば、宗教活動は、仏寺に付属する形で機能しているようである。また昨今では、日本人観光客が台湾の観音三十三所霊場の一つとして参詣に来る人があるという（但し徳化堂の管理者自身は観音の霊場であるとの意識は全く持っていない¹⁶）。

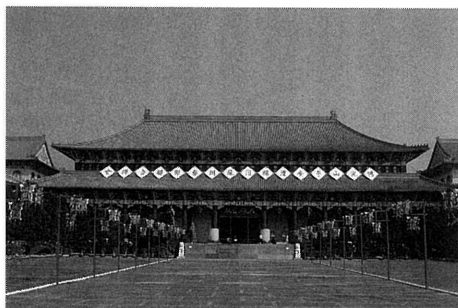
同じ台南地区の安平市にも善化堂という齋教の寺院があるが、その寺院はこの徳化堂と姉妹関係にあるという。もとは徳善堂という齋教の寺院であったものが道路拡張のために二つに分離され、一つが徳化堂、一つが善化堂になったのだそうである。今の境内は、本堂を挟んで両側と裏側に建物があるのみで、堂の一つには位牌を納めたいわゆる位牌堂も存在した。信者さんの位牌なのだそうである。齋教の信者は道教の廟にいく人もあるという。

行事としては月の一日及び十五日に『観音経』を読んでいるが、

昔は道教経典も読誦し、その時には『太上無極混元真経』を使ったそうである。なお、徳化堂の日常の管理には会計一人、その他全般的な庶務に二人が当たっており、出勤時間は朝の六時から午後の五時半までとのことであった。このような点でも、委員会管理の道教の廟や宮に近いところが感じられた。また一ヶ月に二日は休みが取れるそうである。なお、台中に慈音堂（台中縣潭新田村豊興路二段三三八巷一一之一号）という、台南の徳化堂の流れをくむ齋教の堂宇があるとのことであった。

5 高雄・仏光山

台湾南部の中心都市は高雄市である。その高雄市の郊外に存在する仏光山が仏光山である。仏光山はすでに馴染みになっている方も多であろう。聞きしに勝る巨大寺院であり、台湾仏教の一大拠点であるといっても過言ではない。筆者も、実は四度目の訪問であったが、今回、修行道に関していくつかの視点を得ることができたので、改めて仏光山において行われている修行に



仏光山

ついで記しておきたい。

現在、高雄の拠点に居住する出家者は、約五百名、全世界をあわせると一千三百人に及ぶ。日本でも本栖湖畔に日本支部が建設されている途上である。高雄の仏光山本部では今年（二〇〇六年）は受戒会を予定しており、全台湾から受戒希望者が集まるだろうと予測している。朝晩の日課は、学生ともども仏学院に付属する堂宇で行うが、一日、十五日の祝晨諷經（祝禱諷經とも）の際には、本来の本堂を使用する。博物館施設も設置され、私たちが訪れたときには中国大陸の江蘇省の泥人形（恵山泥人）展を開催していた。

仏光山の信者数は、花蓮の慈濟功德会に次いで多いのであるが、一般には法会に参加して仏教徒になることが多いと考えられているようだ。また毎月初旬に発行している『普門学報』も重要な機関誌となっている。

さて、信者も含めた修行として「仏七」及び「禪七」が存在し、この両者が重要な行事になっている。仏七は、先にも触れた如く称名念仏と観想念仏とが組み合わさった、台湾においては一般的な修行方法である。仏光山で行われる「仏七」の時程は次の如くであった。

午前 五時三〇分～六時三〇分 朝課（『阿弥陀經』誦誦）
六時三〇分～八時三〇分 朝食

八時～十一時一〇分 称名・観想

一一時三〇分～ 昼食

午後 〇時～二時 休憩

二時～四時三〇分 称名・観想

四時三〇分～五時三〇分 作務

六時～ 薬石

七時三〇分～九時四五分 称名・観想

実質的な行の部分には、ほぼ御線香一本分の時間で区切りがつけられ、まず『阿弥陀經』の朗誦、懺悔文の朗誦、次いで行道（約一五分）、称名（二五分）、坐禅（一〇分）という具合に区分される。坐禅の時には、心の中で「阿弥陀仏」を念じたり、阿弥陀仏の姿形を思い描いたり、あるいは入息出息観を行うこともあるという。

一方の禪七の時程は次の通り。

午前 五時 起床

五時三〇分～六時三〇分 坐禅

六時三〇分～七時三〇分 朝食

七時三〇分～一一時 坐禅

一一時三〇分～ 昼食

午後 一二時～一時三〇分 休憩

一時三〇分～三時三〇分 坐禅

三時三〇分～五時	作務
五時～五時四五分	坐禪
六時～	薬石
七時～九時四五分	坐禪
一〇時	開枕

禪七は僧侶向けのみのものと在家信者向けのものと双方が存在する。坐禪の内容としては、指導者によっても異なるが、一般には入息出息観をさせることが多い。坐禪の時には何も考えない。また話頭を与えることもある。「父母未生前の自己」などの話頭を与え、一念の生じる前は何かということを考えさせるところが、在家の人の場合、仕事に考え続けていたら、それはかえって危険であるという理解から、話頭禪はほとんどしない、とのことであった。代わりに、生活の中に禪を取り入れるという趣旨から、「人間生活禪」という名称を使用している。実際に行っていることは、数息観、四念処観であるという。経行も行うが、それは非常に早い速度で行われるという。

さて、ここにも話頭禪との用語が登場したが、それは「一念の生じる前」に意識を集中させることのようにある。もともと話頭は公案と同じように用いられた言葉であると思われるが、しかし、いつの間にか、心に一念の生じる瞬間に焦点を当てた用語に変化したよ

うである¹⁷⁾。ある心の働きの有ったとして、その直前の心の働き、すなわち一念がふつと生起する、まさにその瞬間の直前に焦点を当てる用語に変化している。

現在、本部には四百名の尼僧、百名の男僧が居る。大学は嘉義に南華大学（哲学科（含む仏教学））、宜蘭に仏光大学を持っている。科目は仏教関連科目のみであるが、一般の高校を卒業してから仏学院に入学してほしいとの念願があるようだ。大学における教師は仏光山出身の僧侶が多い。しかし学生の卒業後の進路は本人の意志に任せており、自分のお寺がある人はお寺に帰ることが多いという。残る場合には、師匠の承諾が必要であり、本人の意志といっても全く本人任せになっているわけではない。また、仏光大学に学ぶ在家学生で寺院に残りたいという希望を持った場合には、在俗のままです寺院に残る道も開かれているとのことであった。

おわりに

台湾における仏教の事例をいくつか見てきた。仏七に独自の工夫を凝らし躍進を続けつつある西蓮浄苑についてまず述べたが、止観念仏と称名念仏の双方が実践されていることを実感できたことは幸いであった。また、実際に西蓮浄苑の修行僧たちがこの修行を通して「仏の功德を念じながら菩提心を発する」ことがもつとも肝要で

あると述べていたことも印象に残った。

ところで、日本の浄土宗や真宗と対照した場合、そこには止観念仏の伝統は殆ど残っていないので、台湾のように止観の立場から念仏を考えることは、とても興味深く思えた。というのは心を静めていく方向の修行は、彼らは「止静」との言葉を使って表現していたが、そこには確実にインド仏教から流れる「samatha止」の伝統が生きていると捉えることが可能だからである。そして止が可能であれば、そこから自然に「観」が導かれてくると考えられる。

次に、実際の調査の報告を中心に記した。戒律の実践を重視している南普陀寺、また世俗の世界との接触を極端にそぎ落とし修行に専念している正覚精舎、そして在家の信者の教導に積極的に関与している靈巖山寺や仏光山など、それぞれ興味深い存在であった。なかでも靈巖山寺は仏七なる修行法が台湾に積極的に行われるようになった拠点として重要であるとの認識に至った。仏光山においては「仏七」及び「禪七」の修行が双方とも実施され、在家の人たちを取り込んで、仏法の布教が行われているとの感を強く持つこととなった。そして、同じ仏七といっても、それぞれの寺院において修行の内実においては工夫がなされていることに気が付いた。一支香分の時間で区切り、繰り返していく靈巖山寺や仏光山、そして時間を長めに取り二支香分の時間を費やしている台北の西蓮浄苑と、そ

れぞれ異なりがあることは意外な発見であった。今でも仏教者たちが創意と工夫を凝らして、それぞれ独自の修行法を編み出し続けているといっても過言ではない。台湾仏教はそのような意味で自主的であり、また懐が深いと言えるのではあるまいか。

注

- (1) 拙論「台湾における仏七簡介」「禪研究所紀要」三四（平成一八年）。
- (2) 智諭和尚講述『仏七講話 第一集』（西蓮浄苑、二〇〇三年）。
- (3) 智諭和尚、前掲書、二四頁。
- (4) 智諭和尚、前掲書、二二頁。
- (5) 蘇州の靈巖山寺は平安時代初期に弘法大師空海が長安に上る途上で立ち寄った寺院でもあるという。西園戒幢寺、寒山寺とともに蘇州三大寺の一つ。末木文美士・曹章祺『現代中国の仏教』（平川出版社、一九九六年）、三六八頁、参照。
- (6) 『台湾仏寺導遊《八》』（菩提長春、一九九六年、台北）一〇九頁。
- (7) 大正四七、24011-14。
- (8) 西蓮浄苑、発行。
- (9) 慧遠については、牧田諦亮『中国仏教史研究』第一（大東出版、一九七七年）一二三―一五四頁、横超慧日『中国仏教の研究』第二（法蔵館、一九六七年）一九四―二〇四頁、などを参照。慧遠は『槃舟三昧経』に基づき念仏結社を作っていた。
- (10) 印光は二〇世紀初頭に浄土教を広めた法師として名高い。江燦騰

「清末民初印光大師の浄土思想」(江燦騰『中国近代仏教思想的諍辯与發展』南天書局、一九九八年、台北、四一七―四二七頁に収録)を参照。『印光大師全集』(全七冊、仏教出版社、台北)、『印光法師文鈔全集』(上下二巻、新文豊、台北)などが資料集として存在する。

(11) 靈巖山寺の量公大師は浄土宗第十三祖とされる印光(法名は聖量)を指す。印光は一九三七年から四〇年にかけて浄土宗を蘇州の靈巖山寺において弘法したという。太虚、弘一、諦閑と並ぶ一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて大陸で活躍した四人の重要な僧侶の一人である。末木・曹共著、前掲書、三六八頁及び岑学呂編・慧光大島龍玄訳『虚雲和尚伝——百二十歳の生涯』(叢書房、一九九六年)一九五、一九六頁などを参照。

(12) 但し、比叡山等に伝持される常行三昧などでは観想念仏の伝統も存在するので、日本の浄土信仰が称名念仏だけであるとすることも出来ない。

(13) この言葉と逆の表現が中国成立の論書の中に見出すことができる。たとえば吉蔵の『金剛般若経疏』巻二には「其人内秘菩薩行、外現聲聞」(大正三三)とあり、内に秘められるのは菩薩行であるとの位置づけが存在する。

(14) 『台湾仏寺導游』(九)一一頁、参照。

(15) 齋教は在家仏教の一つと考えて良い。江燦騰・王見川主編『台湾齋教的歴史観察与展望』(新文豊、一九九四年、台北)を参照。

(16) 東海亮道編・陳水源・黄櫻楚監修・野川博之著『台湾三十三観音巡拝』(朱鷺書房、二〇〇四年)には観音霊場としては収録されていない。

(17) 公案、話頭は検討が必要な用語である。一般に禅は公案禅、話頭

禅、黙唱禅、看話禅など、その特徴となる言葉で表されることが多い。古くは公案禅と話頭禅とはほぼ同じ内容を持つものとして考えられている。しかし、現在では公案禅と話頭禅は異なるとの意識が芽生えていくようである。たとえば、岑学呂編・慧光大島龍玄訳『虚雲和尚伝——百二十歳の生涯』(叢書房、一九九六年)など。

〔附記〕参加メンバーは、平成十七年には青野貴芳(本学非常勤講師)、曾根原理(東北大学助手)、倉島隆行(天王寺副住職)、氏及び小生の四名、通訳は李齋芳女史、平成十八年には林淳(本学教授)、青野貴芳(本学非常勤講師)、倉島隆行(天王寺副住職)、小生の四名と通訳は鄭夙雯女史(本学人間文化研究所研究員)であった。通訳の労を執つて下さった両名には、此処に記し心から感謝の意を表したい。